

清流

題 字 : 芳野 充

令和7年9月30日

第105号

発行所 加来不動産(株)

発行者 加来 寛

北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに

静かに

清流のように

人生は「何を見ようとするか」で変わる

先日、取引先の金融機関担当者（Sさんと呼びます）から「大学生が就職前の職場体験で当行にきているので、よろしければ学生たちに色々アドバイスしてもらえませんか」との連絡が入りました。とまどいましたが、ちやうど時間も空いていたので会うことにしました。

しばらくするとSさんが、現在大学三年生という女子学生ふたりを連れて来社しました。雑談をまじえながらわたしが「何か他に聞きたいことはありますか」と声をかけると、一人がすこし間をおいて「自分に合う仕事をみつけるにはどうすれば良いですか」と質問してきました。

この質問に対してしばらく考えたわたしは「自分に“合う合わない”という視点で仕事をしないことではないでしょうか」とかえしました。つづけて、「わたしはいまの不動産という仕事に誇りをもっているし天職だと感じている。ただ仕事をはじめたころは『不動産業は自分には向いていない』と思っていた。それは『自分にはもっと他に合う仕事があるはずだ』と目の前のやるべき仕事に目を向けられていなかったから。しかし立场上、辞めることができないわたしがしたことは、『どうやったらやりがいを感じられるようになるか』を見るように意識を変えたこと。その連続がいまのわたしです」という話をしました。

納得したような納得できないような表情をうかべる二人をみてわたしは、ある体験をしてもらおうと思って次のようなことをお願いしました。それは軽く目を閉じてもらおうことです。その状態で「この事務所内にみどり色のものが何ヶ所ありましたか」とたずねました。目を閉じたままの二人は首をひねりながら「：わかりません」と答えます。目を開けてもらい、みどり色のものを探してもらうと、たくさんあることに気づき目を丸くした表情が印象的でした。

その後、人は自分が見ようとするものしか見えないし、聞こうとするものしか聞こえない生き物だということ。だから“合う、合わない”という視点で仕事をするとは自分の視野をせざる可能性のあることを伝えると、とても納得した様子でした。また直後Sさんが興奮気味に「勉強になりました！この話、社内でも共有しますし、わたしは今、部下の悪いところばかりに目がおいてるので、良いところに気づけない状態だと気づかされました。部下の良いところを探します！」と熱っぽく伝えてくれました。

こんなえらそうなことを口にしていきますが、先日妻から「髪を切ったことも気づかないんですね」とチクリ。自戒の念をこめつつ、自分だけではなくまわりの人や地域、あるいは不動産業界がいま以上に良くなるために、わたしは何ができるか、を見つめながら少しずつ前進していきます。

加来 寛

